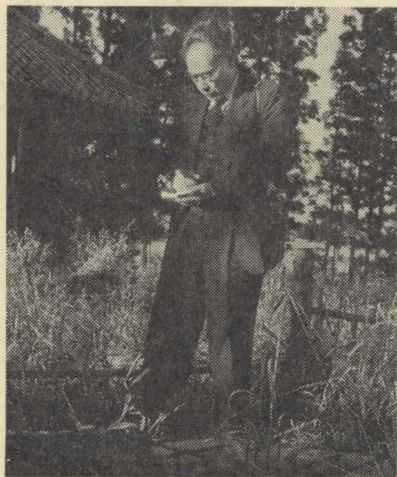


中山義秀全集

第五卷



電光 (いなづま)

美しき囀

生ける魂

木曾川物語 他

新潮社版

中山義秀全集

第五卷

新潮社版



© Tetsuya Akada, Reiko Yamamoto and
Himeko Nakayama, 1971, Printed in Japan.

中山義秀全集 第五卷

發行 昭和四十六年十二月十日
セット版 昭和五十一年八月三十日

セット定價 二七〇〇〇圓

著者 中山義秀

發行者 佐藤亮一

發行所 株式會社新潮社

東京都新宿區矢來町七一、電話
業務東京二六六一五一、編
集二六六一五四一一、郵便番號
一六二、振替東京四一八〇八

印刷所 塚田印刷株式會社
製本所 神田加藤製本

亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社
通信係宛御送付下さい。送料小社負
擔にてお取替へいたします。

中山義秀全集第五卷 目次

電光

五

美しき囀

四四

生ける魂

三七

青春の塔

三九六

七色の花

四八七

木曾川物語

六四四

*

解説

野村尚吾

七〇五

解題

七二五

中山義秀全集 第五卷

電^{いな}
光^{づま}

高温泉行の、私設鐵道に乗換へてから、樹の間がくれに、水音も聞えるばかり、ヒタヒタと波うつてゐる、深く、寂^{しづ}な湖のすがたが、しばらく鳴尾の眼をたのしました。

汽車が、湖畔からそして、山^{やま}の間にわけいりはじめると、車窓をかすめる木立の茂が、すっかり眺望をさへぎつてしまつたので、鳴尾は窓からはなれて、ゆれうつる青葉色の光の中で、ふたび雑誌を読みだした。

あか錆びた、ちつちやな機關車のおしりに、それに相應した客車と貨車とを二つ、くつつけたぎりのカアは、軌道が狭いうへに、枕木も平でないときみえて、動揺がはなはだしい。ガタガタと背を窓へうちつつけてゐる乗客達は、みな高温泉行の人々にちがひないのだらうが、いづれも夫妻連や家族同伴者等であつて、單身なのは鳴尾だけだ。

いや、鳴尾の側にもう一人、猫背で、いが栗頭の、色の

黒い男が乗つかつてゐたが、彼は多分この土地の人であらう。見掛は鳴尾と、いくらか年齢が違つてなさうだが、がつちりと落着はらつて、乗客等の様子をじろじろと眺め廻してゐる工合では、これで案外年齢をくつてる代物かも知れない。

鳴尾は、膝の上に雑誌をひろげてはゐるものの、車體のはげしい動揺に、とかく視線がさだまらず、よそへ氣をとられがちだつた。それも無理はない、彼の心は、今、樂しさにふくらみつめてゐるのである。彼はこれまで、海岸や温泉場へたびたび避暑に行つたことはあつたが、いつも両親や兄弟連で、一人で放たれたのは此度が初めてだつた。

しかも、彼にとつて未知の土地へ、ほとんど冒險的に出かけてきたのだつたから、さまざま期待と空想とがむらがり加はつて、雑誌を読むことなども、じつは上の空のやうなありさまなのだ。

鳴尾は、汽車ののろくさを、齒がゆがつてゐた。下りの汽車を待合せるために、つまらない中間驛に長いこと停車したりしてゐて、地圖の上ではそれほどない距離を、二時間餘も費してコトコトと登りつづけてゆくのである。

鳴尾が、雑誌を読むでも讀まぬでもなく、火山を背におひ、いくつかの湖沼に圍繞された、行先の高原温泉場の風景を、いろいろに想像してゐると、

「お客様は、やはり、高までいらつしやいますか」と、隣席の猫背の男が、不意に話しかけてきた。

鳴尾が、

「はア、さうです」と、ぶつきら棒に返事をする、男はかさねて、

「どちらへ、お泊りでいらつしやいますか」

鳴尾は、學生らしく無造作に、

「僕は初めてなんですけれど、高ちやアどんな宿屋がいいんですか」と、逆に訊きかへした。

男が曖昧な表情をして、

「宿屋といつても十數軒ございますが、靜かで、見晴のきくところといつたら、さア何處でせうかな」と、首をひねりかけるのを、性急に、

「ああ、そんな所がいいな。そんな場所で、いい宿屋がありませんか」

すると、男はその眞つ黒な顔に、それでもいくらか卑下したやうな笑をうかべて、

「ちやア、どうでございませう、いつそ、手前共へ御逗留願へませんでせうか」

鳴尾は、その瞬間思はず、なアんだ、こ奴、宿引だつたんか、といふ顔附を露骨にしめたが、すぐ、これもなにかの偶然なチャンスのやうな氣持になつて、

「君の所は、何んといふんです」

「湯元館と申しまして、高では、まア一番古株にあたります」

鳴尾は、現金に相手の風采に氣をつけたしながら、

「眺望は、ほんとにいいんかな」

男は彼の疑ひに答へて、

「溫泉町の奥の、一段と高い所にございますから、それはもう第一番といふところでございます」と、特に聲に力をいれ、鳴尾ばかりでなく、あたりの乗客達の顔まで見廻しながら自慢した。

鳴尾は、行つてみればすぐわかることだから、嘘はあるまいと考へ、さういふ好い宿屋へ誘はれることになつた自分を、またしても祝福して、

「君は、湯元館の番頭さんですか」と、あらためて訊いてみると、

「いいえ、私はその倅です。町へ用足しに行つた、その歸りでございます」と、ムキになるばかりの顔色で訂正したので、鳴尾は自分の言葉を氣の毒に思ふよりも先づ、年をとつてゐるのか若いのか、年齢のほどもわからぬ、この高原兒の素朴な誇に、知らず知らず顔面がゆるんできた。

溫泉場の午後二三時頃といへば、午睡でもないかぎり、

ちよつと所在に苦しむ、間のぬけた時刻であるが、安江と千恵子とは、宿の自慢にしてゐる見晴のいい二階で、廊下にもたれ涼風にふかれながら、街道をあがつてくる、新來の客の群を眺め下してゐた。

終點についた私設鐵道の客は、高原の赤土道を、一度谿へ下り、谿流の上に高く架せられた釣橋を渡つて、ふたたびだらだら登りに、温泉街の正面へ現れてくるのであつて、彼等の姿を眺め待つことは、温泉場の長い滞在客達にとつては、つれづれの時をまぎらはせる慰めとなる。

ところで、幅廣い大通の兩側に、檐をならべて向ひあつてゐる多くの旅館は、みな特有の性格といつたものをそれぞれをなへてゐて、それ等に相應した種類の客達を、おのづと吸収してゆくから妙である。時には、少し變つた客でも、飛込んでこないかなアとすら思ふ。

安江や千恵子等の氣持にも、自然とさうした心理がはたらくとみえて、彼女達は退屈しのぎに、新來の客達の落着く先を、あれこれと推定しはじめた。

「ねえ、千恵子さん、あの方たち、どこへ行くと思つて」

「あれは、桶口館」

「なら、あのお年寄夫婦は」

「わかるわ、梅の屋よ」

「ぢやア、あの會社員の御夫婦は」

「チェッ、會社員だか、相場師だか、分りやアしないぢやないの。年の割に奥さん、派手すぎるわ。望岳樓よ」

「よけいなこと、千恵子さん、云はなくなつていいわ。でも、よく當るわね。感心しちやつたわ。どうしてよ」

「なんでもないわよ。番頭さんたちがお附きだもの」

「それにしたつて、やつぱり慧眼にちがひないわ。私には、誰がどこの番頭さんなのか、ちつとも見境がつかない。わかるのは、うちの虎さんぐらゐよ」

「ははははア、虎公は今日も番頭代りに、奮闘これ努めてゐるんだらうけど、さつぱり獲物を啣へてこないぢやないの。虎でなくたつて、あの御器量ぢや、婦人客は寄つかないわ」

「それで、丁度いいのよ。このうへ混雜したら、私、鬱陶しくて困るわ」

「私、鬱陶しいぐらゐなのが好き。虎公も、親爺も、ケチで手堅い一方だから、お馴染さんしきややつちやこないわ」

「だから、助るんだわ。知つた人達ばかりで、ゆつくりと保養ができるのだわ。私、知らない人達と、合宿所みたいに混みあつてゐるの、考へたばかりでもソツとするわ」

「左様でせうとも。あんたには崇拜者が、もうたんとござんすからね」

「あら、よしてよ。崇拜者なんか、誰もいないわ」

「津本さんだの、比木さんだの、小野寺さんだの、多ア坊だのつて、その上どれだけ欲しいのさ」

「それ、みな千恵ちやんのお友達ちやないの。千恵ちやんこそ、みなから狙はれてんだわ」

千恵子は、「エー」といふ風な眼附で、安江を横に睨みつけると、空を仰いで、ことごとしく十字を切りながら、「ああ、そは罪深き言葉なり。己が心を欺くは、神を欺くごときものと知るべし」

安江は、背を折曲げて笑ひこけながら、

「それ、なによ、比木さんの真似でせう」

「誰の真似でもありやしないわ。あんたの罪深き心を云つてゐるのよ」

「おやおや、ご親切さまですこと。でも、私、自分の心も神様も、欺いたことなんかないわ、お氣の毒さま」

「まアこ奴、どこまでも白をきつて……」

さう叫んで、千恵子が冗談に安江を打たうとした途端、女中に案内されて、鳴尾が二階の階段口に現れてきた。

「お年寄のお客様が、おひとかたいらつしやいますけど、お宜しうございますか。ちつとも、氣の置けない方でございますから」

鳴尾は、女中の言葉に、「うん」と返事をして、ほとん

ど出合頭に安江達と顔をあはせると、ハッとしたやうに足を止め、硬直した表情になつたが、次の瞬間には眼がちかちかするばかり赧くなつて、足ももしどろに彼女達の横を通りすぎて行つた。

「虎さん、やはり啣へてきたわね」と、安江がにつこりと笑ふと、

「高校の生徒さんよ。この邊には、ちよつと珍客だわ」

そこで千恵子は、ちらりと舌をだすと、鳴尾のまごついた姿が可笑しかつたのか、袂を押へて剽輕に、くつくつと笑ひだした。

鳴尾は、稻妻をあびたやうに、心が光りふるへた。彼は、袴のまま座敷の中央にひつくりかへつて、おお、なんといふ容貌の彼女であらうか、と考へた。

（僕はまだ、彼女のやうな女性に、曾て會つたことがない。僕のはかない夢のうちにしか、存在しなかつたやうな女性だ。）

彼は、あらたにはげしく打出してきた動悸とともに、身體までが顫へてくるやうな氣がして、目をつぶつた。すると、今、するどく彼の感情をうつてきたばかりの安江の顔が、一層あざやかな映像となつて、彼の心にせつなく迫つてきた。

（奇蹟だ、奇蹟が僕を待つてたんだ、さうとしか考へられぬ……）

そこで彼は、不意にびっくりとしてはね起きた。敏感になつてゐた彼は、折から部屋へ近づいてくる人の足音に、愕かされたのである。

銅色の、見上げるばかりにたくましい、海坊主めいた老人が、湯上りの汗を拭きながら、部屋へはいつてきた。老人は鳴尾のことを、すでに帳場から聞いてきたらしく、「やア、いらつしやい」と、磊落に挨拶した。

鳴尾が女中の言葉から想像してゐた老人とは、だいぶ勝手がちがつた感じだつた。彼はあわてて居ずまひをなほすと、老人にむかつてびよこりと頭をさげた。老人は、女中が新しくはこんできた茶をいれながら、

「道中は暑かつたでせう」と、お愛想を云つた。

「汽車の中は、そんなでもなかつたやうです。湖のあたりは涼しいくらゐでした。併し、輕便ののろくさいのには、もどかしいよりも呆れつちやひました」と云つて、鳴尾が笑ふと、老人も相槌をうつて、

「はははは、あれはまつたく、乗合馬車みたいなもんですな。で、東京から眞つ直ぐこちらへいらつしやいましたか」

「はア、ほとんど、盲滅法にやつてきちやつたんですけれ

ど、此處はじつさい、すばらしい所ですなア」と、鳴尾が青年らしい感激を聲にだして、廊下の手摺越に見渡される、眼下の高原の方へ顔を向けると、老人は眼尻の皺をふかくして、

「景色では、何處にもめつたにひけはとらんやうですな。ただ、世間があんまり知らんだけで、僕は、夏になると毎年此處へやつてきても、一向無精で出歩きもしませんが、足の丈夫な方なら、いくらでも見物するところがあるですよ」と、我がことのやうに自慢したが、鳴尾の袴姿で畏つてゐるのに氣がつくと、

「東京から、ちかにいらつしたんぢやア、さぞお疲れさんでせう。さア、さつそくひと風呂あびていらつしやい。景色ばかりでなく、湯も此の地方では名湯といふことになつてゐて、なかなかはいり心地も宜しうござんすよ」と勧めた。

鳴尾は、それをしほに起ちあがつて袴をぬぎながら、それとなく廊下の方をうかがひ、先刻の女性達がすでに姿を消してゐるのをたしかめると、安心した風に、

「ぢやア、湯につかつてきます」と云つて、廊下を左へ廻り、元氣好く階段をおりていつた。

老人に教へられるまでもなく、浴場の方角はぢきにわかつた。かすかな水音ばかりの、ひつそりとした氣配に、な

にげなく曇の硝子戸を開けて、中へはいりかけた鳴尾は、ちらりと浴場の内部を覗くと、ひどくあわてた様子で、再び戸をしめ外へ出てきてしまつた。

彼の顔は、みるみる火を點じたやうに赧くなり、しきりに頭上の男湯と女湯の札を見くらべてゐたが、結局斷念して、ぼんやりと部屋へ引返してきた。

老人は、いささか驚いた顔色で、

「いやア、これはまたお早いですな」と云ひかけて、鳴尾の乾いたタヲルに眼をつけ、

「なアんぢや、浴場がわからなんだとみえますな。女中にもお訊きなさりやよろしかつたのに」と、起ちかかるのを鳴尾は止めながら、ふたたび赧くなつて、

「男湯に、婦人の方がはいつていらつしたやうでしたから」

すると、老人はたちまち聲高く笑ひだして、

「そんなことア、もう構ひませんとも。此の邊ぢやア男湯も女湯も、區別があつてないやうなもんです。娘さんばかしだつて、決して御遠慮なさるにはおよびません。あはははは」と、老人は上機嫌だつた。

「だあアレ、今の。戸が開いたんぢやなかつた」と、安江が千恵子に訊いた。

千恵子は、無言に湯壺のふちを下り、すぼりと湯につかると、そのまま蛙の恰好に手足をひろげ、バタバタと湯玉をはねとばしながら、湯壺の中を泳ぎだした。

安江は、湯壺の隅に退き、飛沫に顔をしかめて、タヲルを顔の前にかざした。千恵子は、湯壺の中を一廻りすると、安江の腕をつかんで、

「ね、あんたも一緒に泳いでみない」

「私、泳げないもの、駄目」と、安江が身を締めようとするのを、むりにひつぱりだすやうにして、

「かうするのよ。なんでもないわ」

そして、安江と一緒に泳ぎだすつもりだつたのが、安江が動かないので、たちまち沈没しさうになり、あわてて安江の腕をはなすと、もう無茶苦茶に湯の面を叩いてあばれた。安江はさうさうに湯壺から飛出すと、白いタイル張の流し場もずつと奥へ遠のき、草色に芽えた湯の表面を白くかきみだして、傍若無人に暴れまはつてゐる千恵子の、すべすべとした眞つ白い裸姿を、まるで白鳥の水浴のやうだとみとれてゐたが、自分の髪からまで雫がたれてゐるのに気がつくとも、千恵子のあまり好い氣になつてゐるのが、ふと憎らしくなり、足もとの箱槽からあふれだしてゐる清水を、こつそりと小桶に掬ひ取ると、こちらへ向いて、恰も二つの袋のやうにむくむくと動いてゐる、千恵子のまるま

つちい臀へ、びしやりとあびせかけてやつた。

千恵子は、「ギャツ」と叫んで沈没すると、そのまま湯の中をくぐりぬけ、安江の方へ匍ひあがつてきながら、

「何すんのよう、氣持の悪いこと、しないで頂戴」

さう云つて喰つてかかる千恵子の、髪をびしよびしよに上氣してゐる顔へ、安江はくるりと背を向け、全身に波うつ笑をやつと抑へて、

「さつき、此處を誰か覗いたらしいの。だから、あまりお轉婆しないやう、氣をつけてやつたんだわ」

「嘘だよう、海坊主は、もうせんあがつちまつたし、兄さんたちは、山へ行つちやつて、まだ歸つてくる筈なの」

「ぢやア、さつき新しく見えた、學生さんかもしれないわ」

千恵子は、ちよつと瞪るやうな眼附をしたが、すぐにまた、けろけろつとした顔色になつて、

「あんなのう、此處へはいつてこれるものか」

そして、そびやかした肩をそのまま、安江の肩と並べてみて、

「此處へきてから、あたひ、ちよつとは伸びたかしら。食欲、營養、運動、一切申分なしときとるから」

安江は、片手で乳房をおさへるやうにしながら、密つと

爪立して、

「かへつて、ちひちやくなつたんだぢやない。喰べすぎよ」

「嘘々、そんなに違ひやしないわ」

「ほら、こんなに」

千恵子も、負けずに爪立して、

「丁度、すれすれぢやないの」

「一時からちがつてるわ」

千恵子は、いきなり相手の腰を抱いて、自分のからだへしつかりと押しつけ、

「駄目、ずるいわ。踵をおろして」

安江は、はげしく身をもんで、

「放して、くすぐりたい、放して」と叫んでゐる背後へ、

どやどやと近づいてくる人々の登音がした。

ふたりは、どちらが先とも云へない素早さで、湯壺の中へ躍りこむと、

「こちらはだめよ。レデイ達が御入浴中だから」

「なんでい、女のくせに男湯へはいつたりしてゐて」と、

甘つたるい聲をだしながら、津本が林檎のやうに赤い顔を、脱衣所から覗かした。

「だつて、さつき海坊主が、あたひ達の湯を占領しちゃつてゐたんだもの」と、千恵子が抗議すると、

「もう今はゐないから、あちらへ行きなさい」と千恵子の

兄の清宮が、顔を見せずに妹を叱つた。

兄の聲に、千恵子は照れて、

「兄さん達、今日は早かつたのね」

そして、濡れた髪をしぼつたタオルで、しきりにこすり
はじめてゐると、それまで黙つてゐた安江が、

「千恵ちゃん、もうあがらない」

さう云つて千恵子を誘ふと、いつもの彼女に似合ぬ燕の
やうな速さで、すらりとした身體を美しくひらめかしなが
ら、反對側の口に姿を消してしまつた。

高原の風物的な存在となつて、大氣の底に、靜かに溶け
こんでゐたやうな溫泉街は、車中の鳴尾の眼を爽かにした。
高原の彼方の、かの遠い湖のあたりから朦朧とくれそめて
起伏する高原や山々の巔に、靄の青白い觸手が動きたす頃
になると、宿々の部屋部屋に灯がともし、廣い街路の上には、
早くも夕食を終へた避暑客達の白い浴衣姿が、蛾のや
うにむらがつて、團扇片手に雑談にふけつたり、子供達の
花火に興じたり、客達の遊歩場となつてゐる公園の高みか
ら、のどかに流れてくる盆踊の太鼓の音もともなつて、山
深い高原の奥に、思ひがけない都會が出現したやうに、生
活の脈ひを生き生きとていしてくる。

老人と同宿の鳴尾の座敷には、呉服商人の瀬川や、株屋

の立石や、千恵子の兄の清宮達が集つてきて、すぐに酒宴
となつた。

骨格のたくましい、「海坊主」の老人は、皆から「馬島
さん、馬島さん」と親まれて、だいぶ人氣がある。濱のか
なりな船主なのださうだが、酒が大好物で、相手があれば、
朝からでも飲んでゐようといふくらゐだつたが、巨大な身
體に似合はぬ行届いた神經と、船乗らしいおほまかな氣性
をそなへてゐるので、人々からたいへんに好かれてゐるら
しかつた。

鳴尾は、この馬島老人によつて人々に紹介されたが、あ
る官省の囑託醫だといふ、千恵子の兄の清宮以外は、好男
子振を鼻にかけてゐるやうな、瞳の暗い瀬川にしろ、また、
顎が二重にくびれ肥つて、まるで白い墓みたいな感じのす
る立石にしろ、鳴尾はあまり好感がもてなかつた。

清宮は、三十歳をやうやく越えたか越えないくらゐの、
舉措も話振も典雅な、優しい青年だつた。絹のやうに柔
い頭髮が、彼の細々とした、青白い額にからみつくやうに
垂れさがり、たえず相手にむかつて、靜かにほほゑみかけ
てゐるやうな、むしろいくらか寂しげにさへうつる表情の
かげに、彼の育ちの良さを偲ばせるひ弱さが、彼の全體の
印象をしめてゐた。

清宮の左耳下に、深く挟られて残つてゐる、淋巴腺切開の

痕が、ことに彼の印象をいたいたしくした。頭髮が金屬のやうに、強い光澤をはなち、唇が薔薇のやうに紅く、皮膚は眞珠のやうなつやをたたへて、健康の標準といった感じのある、色彩も氣質も彈むばかりにはつきりとした、彼の妹の千恵子とは、同腹の兄妹と思はれないやうな對照だつた。

「清宮さん、今日は何か、掘出物がございましたか」と、瀬川がビールのコップを彼にさしながらたづねると、

「まるで、駄目だつたんです。ですから、早く歸つてきちまひました」と、清宮が笑つて答へた。

「もう、此の邊りの山の物は、たいてい採りつくしちやつたんぢやござんせんか」

「あはははは。まさか、それほどぢやないんですけれどね、いろいろと連中があつたりしますと、一人の時のやうに、行つてみたいと思ふ所へも、つい行けなくなつたりして、やはりいけませんやうです」

鳴尾は、何の話であらうと興味をもつて、

「何か採集でもなさるんですか」と、訊いてみた。

清宮は、初對面の彼にも、ひどく親しげな口調で、

「採集つてほどのこともないんですけれど、私には鉢植にする山木を、やたら掘つてくる道樂があるんですよ」

「ああ、巖松とか、珍しい灌木なんかですね」

「ええ、さうなんです。併し、私は商賣人とちがつて、好きな物は何でも掘つてきちやふんです。草や苔なんかまでひつべがして持つてくるもんだから、家の者から笑はれ通しですよ」

「でも、結構ぢやありませんか。それだけ、變つた物が集るわけですよ」

「さうなんですけれど、途中で枯れたり、うまくつかなくなつたりして、人さんが考へるほど集つちやゐらないんです。私は旅行が好きで、到る所から慾張つて集めてくるんですが、大きく云ひやア全國的に」

「そりやア大變だ」

鳴尾が突然、若い學生らしい驚嘆の聲をあげたので、清宮はもとより、他の人々まで笑ひだした。それがかへつて、鳴尾を人々に近づけ、一座の空氣を一層なごやかにした。

瀬川や立石は、馬島老人を相手に、酒飲みらしい猥談をやりはじめた。彼等の無遠慮な笑聲に誘はれて、清宮も鳴尾との話を切上げ、彼等の話に加はりだしたので、酒も猥談もやれない、新來の鳴尾は、ちよつと手持無沙汰のかたちに残された。

清宮の人柄にゆかしさを感じだしてゐた鳴尾は、清宮のやうな男が、瀬川や立石等の下らない話に、平氣で打興じてゐるのを見ると、なんとなく嫉妬めいた不満を感じられ

てきて、座にゐたたまれないやうな氣持になつた。彼は便所へ行く風にして座を立つと、そのまま戸外へ散歩に出かけた。

戸外はいつか、高原の薫をふくんだ、青い、夢のやうな月夜にかはつてゐた。もう街中に涼んでゐる人の影はない。鳴尾は、かうした土地で聞けば、なんとなく異境的な感情が起らないでもない、踊の太鼓の方へぶらりぶらりと、引かれるもののやうに歩いて行つた。

公園の林の中をとほる時、あるともない風に揺すられる梢から、彼の顔や胸や手足の上に、キラキラと洩れおちてくる月の光を、まるで液體のやうに美しく感じた。

温泉神社前の廣場は、踊見物の避暑客等で、ぎつしりと埋められてゐた。鳴尾が見頃の場所を探して、觀衆の背後をめぐりあるいてゐる間に、悠長な太鼓の音は、急に賑々しい東京音頭の調子にかはつてきた。東京では、とうに流行おくれになつてゐる此の踊も、かうした場所では、さすがに人の心をそそるものがあると思え、踊手達も俄に活氣づいてくれば、觀衆もともどもにざわめいてきた。

その動搖する人々の厚みの間に、鳴尾は、彼の腦裏に深く刻みつけられて、もはや忘れがたい面影となつたひとの後姿を、ふと見出したやうな氣がして、たちまち胸をとど

ろかしはじめた。すると、向うでもさういふ彼の氣配を察してでもしたやうに、くると後をふりかへつたところを見れば、まぎれもなく、月の光にかがやき冴えた、安江の高貴な顔だつた。

鳴尾が、かたく緊めつけられたやうに硬張つて、無言でそこに佇立してゐると、つづいて、千恵子のつづらな顔がいきいきと現れ、すでに先からの馴染のやうに、鳴尾を見て「にっ」と笑ひかけた。鳴尾は、その微笑にこたへて、愛想好く笑ひかへしてやれるやうな人間ではなかつたからして、一層困惑し、のぼせあがつて、ことさら彼女等を睥睨するやうな、こはおもてをよそほつてゐると、彼等の前を一步退き二歩進むやうにして、廻つてゐる踊の環の中から、思ひがけなく此度は、津本の赤い、おどけた笑顔が、ひよつこりとあらはれてきた。

すると、千恵子を先に安江まで、あたりに響くやうな笑聲をたてて、またしても鳴尾の方へ、わざとのやうに身をねむむけてくるので、鳴尾のはりつめた神經は、たうとう鞭うたれるやうに痛みだしてきた。彼はその場に強く惹かれてゐたにもかかはらず、彼の意に反し、なかば夢中で廣場をはなれ、よろめくやうに林の中へ引返してきた。

鳴尾はさういふ、自分の力で自分がどうにもならない、臆病で無骨な自分自身にたいする、腹立しいまいましき